

應典院十周年記念誌『呼吸するお寺』(2007年11月10日発行)

【エポックを遊ぶ 2003】 **上町台地の<市民知>を結ぶ つながりのデザイン**

弘本由香里(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 客員研究員)

### 拠点からネットワークの主体へ

出会いといえば、一般的に電撃的な印象で語られることが多い。しかし、遙か遠くから少しずつ近づくような、気の長い出会い方もあるだろう。

奇しくも10周年誌に執筆の機会を頂いた私であるが、應典院との出会いは、後者である。1997年前後、應典院再建に向けたプロジェクトの動向を存知あげてはいたが、積極的な関係を持つことはなかった。むしろ、ある程度の距離を置いていたというのが正直なところである。

その距離が少し縮まる方向に動き出すのは、2001年頃、高田光雄氏(京都大学大学院教授)を座長とした「上本町コミュニティ・ネットワーク構想研究会」(都市基盤整備公団主催)で、秋田光彦氏(應典院住職)とテーブルを囲むこととなったあたりに始まる。同構想は、残念ながら諸々の社会情勢の変化を受けて実を結ぶに至らなかった。しかし、そこで描いたビジョンを、上町台地上に敷衍して問いかけ実践していこうと、2002年から有志が任意団体の設立準備を始め、2003年5月に秋田氏を代表理事として「上町台地からまちを考える会」が発足し現在に至っている。

改めて振り返って見ると、ちょうどその時期は、應典院の5周年前後にあたる。強いリーダーとコンセプトを有する拠点としての評価を越えて、真に開かれたコモンズ(共的資源)に至る具体的な道筋、社会との関係の持ち方を発展的に再構築する、転換期に差し掛かった頃合いだったのではないかと思う。その自問があってこそ、他者との関係性の構築に積極的な意味を見出す、上町台地からまちを考える会(以下、考える会)が成立し得たといえるのではないだろうか。

考える会は、寺町に根を持つ劇場寺院「應典院と應典院寺町倶楽部」、空堀商店街界隈で長屋再生を手がける「からほり倶楽部」、コリアタウン界隈で多文化共生の体験学習プログラム等を展開する「(特活)コリア NGO センター」をはじめ、上町台地界隈で注目すべき活動を見せる拠点地域・団体の関係者や研究者等が集まって動き始めたネットワーク組織である。個々の背景や行動様式は全く異なりながら、「コモンズの再生」「新旧文化の融合」「多文化共生」などをテーマに、市民の知を引き出し結び合わせていくことで、オールターナティブな価値の創造、課題解決の力を育み、地域の持続的な発展を可能にしていくことができるのではないかとの思いを根底で共有している。

こうした市民の知こそ生活文化であり、生活文化の主体、生活の創造者を育むことこそ、本来の都心居住の真価であるはずではないかという問いかけが、協働の原点にある。市場

メカニズムのみに依存する消費者から、他者に学び考え表現する生活の創造者へ転じていくこと。そのために、多様で自律的な学びの場を、いかにまちのなかに重層的に張り巡らせ組み込んでいくかが共通の課題として浮かび上がってくる。学びの場は拠点単体としてのあり方を越え、ネットワークの主体、媒介者としてのあり方を志向していくこととなる。

## 開かれたコモンズ

應典院がまちに開かれた媒介者としてのあり方を具現化した学びのプログラムのひとつが、2004年1月の、トヨタ・アートマネジメント講座（トヨタ自動車（株）・應典院寺町倶楽部主催）「まちとアートの練習問題 芸術化する現場のフィールドワーク」であり、まさにエポックであったと思う。應典院再建以来の一貫したコンセプトのひとつ「アート・オブ・ライフ」の思想と、上町台地をフィールドに模索してきた社会との関係性を足がかりに、アートの力を、生きる現場としての地域の再編に向けて開いていくトレーニングの場となった。

個人化が進む社会と暮らしは、孤立化というリスクと背中合わせである。他者との関係の希薄化は、個人のアイデンティティ確立の難しさ、生命の連続性の実感の乏しさ、多世代・多文化間のコミュニケーションの断絶、そしてソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の弱体化に及ぶ。私たちは、個を基点としながら、他者とのオルターナティブなつながりのデザインを切実に必要とする時代を生きていると言ってもいいだろう。

変化が激しく孤立化に拍車がかかる社会であればあるほど、記憶や知を蓄積し共有していく文化装置や、ゆっくりとしか変わらない自然や幾世代にもわたる時を重ねた歴史資源が、極めて重要な意味を持つてくる。大阪の歴史・文化の宝庫と称される上町台地の諸資源は、決して過去のものではない。オルターナティブなつながりのデザインを生み出していく基盤として、評価し直されるべきものである。開かれたコモンズ（共的資源）としての寺町や應典院の役割、究極の他者である「死者」を背に負うことの意味も、そこに見出されるのではないだろうか。

大蓮寺・應典院の門を潜ると、桜の下で美しい六地藏が訪れる者を迎えてくれる。時には衣の裾を翻し、衆生のために走るというその姿もまた、決して過去のものではないことを思う。